

氏名	久保原 大 <small>くぼはら まさひろ</small>
所属	人文科学研究科 社会行動学専攻
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	人博 第136号
学位授与の日付	平成31年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	親子関係における血縁の位置づけ — 一家族の多様化と血縁意識に着目して —
論文審査委員	主査 教授 丹野 清人 委員 教授 中川 薫 委員（横浜国立大学）教授 江原 由美子

【論文の内容の要旨】

本稿は、多様な家族関係における、親子の血縁と血縁意識、そしてアイデンティティのかかわりを血縁／非血縁親子関係から検討することにより、家族社会学に、親子関係を再考するための新たな視座を提供することを目的とする。

近代日本の「家」制度のもとでは、家督の継承が最重要事項であり、家族形成における血縁はそれほど重視されていなかった。しかし、近年のDNA研究の進展や生殖補助医療技術の発展にともない、人びとの血縁意識が強化されている観がある。生殖補助医療は、性行為をとまわらない妊娠・出産を可能にし、女性が自分と血縁のない子どもを産むことも可能にした。そのことが代理出産というシステムを生み、代理出産がビジネスとして成り立つようになった。そしてその代理出産においても、依頼者のカップル双方もしくは、一方の血縁（遺伝的つながり）が目的とされている。

また、近年AIDによって生れた人たちによる手記などが出版され、AIDへの問題提起をしている。精子提供者が匿名で行われてきたAIDは、アイデンティティの揺らぎや、そのことを秘匿していた親に対する不信感をもたらし、親子関係におけるトラブルの要因となっている。

そして、離婚の増加にともなう再婚の増加によって、現在では婚姻の4組に1組が再婚であり、ステップファミリーも増加している。ステップファミリーは、どちらか（もしくは両方）の親に非血縁関係にある子どもがあり、血縁親子関係と非血縁親子関係が混在する。

そのような状況の一方で、社会的養護のもとで生活する子どもたちの中には、血縁者である実親から切り離されて生活している人たちがいる。近年の児童の入所理由の多くは虐

待によるものであり、その後の家庭復帰が難しいケースもある。相談対応件数が増加している児童虐待においては、虐待者の多くが実親であり、血縁のある子どもをなぜ虐待してしまうのか、ということもある。さらに、虐待には、実親だけでなく継親や、実親の非血縁パートナーが関与しているケースもある。このようなケースでは、子どもと血縁がないことが影響していることが疑われるが、そのような視点から検証されたことはない。

このように、技術の進歩や社会状況の変化によって、家族の多様化がひろがり、家族に対する人びとの意識も変化してきていると思われる。しかし、ステップファミリーの増加や特別養子縁組に見られるように、親子関係における血縁からの距離化が図られている一方で、生殖補助医療の現場では血縁に対するこだわりが見られる。この相反するような血縁意識のひろがりには、今後の家族観にさまざまな問題提起をするだろう。けれども、これまで人びとの血縁意識がどのようなものであるかを検討した研究はない。先行研究では、多様な非血縁親子関係を概観し比較する研究があまり行われていないために、血縁と血縁意識に焦点を当てていない研究ばかりが、多く生まれている。しかし、生殖補助医療の進展や DNA 研究の発達で、一般の人びとの血縁に対する意識にも影響を与えていると思われる今日、人びとの「血縁・血縁意識・アイデンティティ」に関わるこだわりや不安、そして疑念や欲望について、十分な研究を行わず、考慮しないで行っていることは、非血縁親子当事者が現在直面しているさまざまな問題に対して、的確な対処法を提供しないどころか、問題を正面から受けとめることすらできない状況を作っているのではないだろうか。

そこで、先行研究の問題点を集約すると、一つは、「家」制度に基づく親子関係において血縁が擬制されたことや、その延長線上にある AID にみられるように、親子関係における血縁とアイデンティティが分節されて捉えられていること。二つ目に、血縁がある／ないという二項対立が基準となり、血縁がある／ないことそれぞれが持つ正／負の二面性を捉えていないこと。そして最後に、血縁意識、特に親子関係における血縁は重要であると思いつつも、実際には、ほとんどの人が親子鑑定をしていないのに、親子であると確信して一緒に生活しているという、人びとの矛盾しているような血縁意識を捉えていないという三点に整理できるだろう。

では、人びとの血縁意識とはどのようなものなのだろうか。人びとの血縁意識は強いのだろうか、それとも弱いのだろうか。親子関係に血縁がある／ないことが、親子双方にどのような影響をもたらすのだろうか。人びとの血縁意識は矛盾しているのだろうか。血縁や血縁意識がなぜアイデンティティ形成に影響するのか。これらのことを明らかにしない限り、親子関係における血縁にかかわる問題への対処はできないだろう。したがって本稿では、親子関係における「血縁・血縁意識・アイデンティティ」の関わりとはどのようなものか、という問いを立て、それをさまざまな事象から分析する。

まず、生殖補助医療の進展は、これまで子どもを持つことが叶わなかった人たちに、自分たちの遺伝子を引き継ぐ子どもを持つことの可能性をもたらした。しかしまさにそのことが、親子関係における血縁意識の強化をもたらしている、と思われる。さらに、生殖補

助医療の進展は、複数の親をもたらすことにもなった。その一つである AID によって生まれた人たちが、その事実を知って受ける衝撃は、父親と思っていた人が父親でなかったということだけでなく、自分の遺伝上の父親が誰かわからないというものであった。AID で生まれた人たちの語りからは、親子関係における血縁がアイデンティティと関わっていることがうかがえた。

次に、非血縁者による養育という観点から、実親の代替としての児童養護施設に着目し、血縁者である実親を頼れないことがもたらす困難を明らかにし、その対応策を検討した。近年の施設の入所理由は虐待によるものが多く、被虐待という経験がコミュニケーションスキルに影響し、血縁者である実親を頼れないことが、その後の生活に多くの困難をもたらす。

次に児童養護施設や里親のような公的実践と、特別養子縁組やステップファミリーのような私的実践における非血縁親子関係の血縁について検討した。

その結果、児童養護施設と里親では、同じ公的実践としての子どもの養育であっても、その養育環境や養育者のスタンスなどにより、大きく異なることが明らかとなった。施設は、そのシステムや養育環境により、職員と子どもの間に血縁を意識させるような状況は生まれにくい。しかし、同じ社会的養護であっても、里親においては、施設のような職員の流動性はなく、同一の養育者がかかわることになる。また、子どもの養育が家庭で行われるため、子どもとの親密性は施設に比べて高くなる。したがって、施設に比べ一般家庭に近いために、目指される関係性も一般家庭に近いものとなる。これは、両者の関係性がうまくいっているときには何の問題もないが、関係がうまくいかず、その原因がわからないときにそれが血縁に還元されるリスクがある。

特別養子縁組とステップファミリーでは、特別養子縁組においては、両親とも子どもとの血縁がないが、ステップファミリーにおいては、血縁者と非血縁者が混在する。Turner, Finkelhor and Ormrod らは、家庭内に継親がいることは、シングルペアレント家庭以上に虐待のリスクが高く、ステップファミリーが介入すべき重要な対象であることを指摘している。

公的実践の背後には明らかに「公」に含意される責任があるが、同じ公的実践である児童養護施設と里親では血縁に対するスタンスの違いがあった。また、同じ私的実践である養子縁組とステップファミリーでも血縁に対するスタンスには違いがあった。そこには、それぞれが公的／私的であることの違いだけでなく、その養育形態や成員の構成などの違いにより、養育者から子どもに対する血縁の捉え方だけでなく、子どもから養育者に対する血縁の捉え方にも違いがあることが明らかとなった。

次に、大学学部生へのアンケート調査から、大学学部生の血縁意識がどのようなものであるかを検討した。その結果、大学生の血縁意識は強い傾向にあることがわかった。そしてそこには、家族における血縁は重要だと思いながらも、もし現在の両親と血がつながっていないとわかっても、現在の両親を選択するという、一見矛盾するような血縁意識の存

在があることがわかった。そしてそれは、定位家族である現在と、将来生殖家族になることを想定した場合に、血縁意識の違いがあることにも見られる。また、血縁意識の強弱が血縁にかかわる選択において影響することも明らかとなった。しかし、そこにおける選択は、状況依存的で曖昧なものであることが示唆された。それは、多くの人びとが自身の血縁意識には自覚的ではなく、一般論や周りの環境の影響を受けており、血縁が自身の問題として直面するような状況にならない限り、真剣にとらえようとしないと考えられるからである。

これまで、血縁意識についての大規模調査は行われておらず、このような結果は、これまで述べたような家族に関わる問題に影響を与えることが考えられ、さらなる検証が求められることが示唆された。

次に、離婚という経験が血縁意識に作用するかをシングルマザーへのインタビュー調査により検討した。その結果、離婚によって、血縁があることが相反する意識をもたらすことがあることが示唆された。それは、血縁を重要視すれば、自身と子どもとのつながりは「切っても切れない関係」だからこそ強固な紐帯として捉えられるが、元パートナーと子どもとのつながりは「切っても切れない関係」だからこそ複雑な感情を惹起するという、相反するような血縁意識となってしまうことである。

また、シングルマザーの再婚は必ずステップファミリーとなるため、普段は当たり前のこととして潜在化されている血縁意識が、ステップファミリーを形成するときには顕在化され、自身の意識と継子となる子どもの意識が異なると想定された場合に、その血縁意識の壁をどのように超えていくかが重要となることがうかがえた。

最後に、増加する児童虐待において、非血縁パートナーに着目し、血縁意識が影響しているかを児童虐待検挙状況から検討した。その結果、児童相談所が公表している児童虐待相談対応件数では、非血縁パートナーの存在はそれほど大きくないが、児童虐待検挙状況をみると、そこには明らかに非血縁パートナーの存在がみてとれた。

また、ステップファミリーの予備軍ともいえるシングルマザー世帯における、非血縁パートナーからの虐待のリスクが高いことも明らかとなった。

以上のように、「血縁・血縁意識・アイデンティティ」はそれぞれ強固に関係しながらもその様相は、複雑であることがわかった。また、多くの人びとの血縁意識は、親子関係における血縁が当たり前であることなどから潜在化され、自身の血縁意識に自覚的ではないことが明らかとなった。そしてこの人びとの血縁意識を捉えない限り、血縁意識が関与していると思われる問題への対応策を検討することはできない。

通常、親子関係は血縁を媒介として親子というアイデンティティを形成する。そして、それが「切っても切れない」ものであることがその関係を強固にする。さらに、「切っても切れない」ものであることが、親子というアイデンティティを非血縁者間に形成することへの排他性を強める。養育者と子どもの関係における血縁は、血縁がある／ないだけでなく、その双方に正／負の二面性があり、それが状況によりさまざまかつ、複雑な様相を呈

するのである。

これまで、結婚するとは、家族を形成するとは、子どもを持つとはどういうことかが学校教育に組み込まれることがなかった。しかしながら、家族の多様化が進んでいる現代社会において、それらについて教育機会を設ける必要があると思われる。

では、これまで述べてきたような家族の問題に対応するためには、どのような視座が求められるだろうか。本稿では、進化論的アプローチと人的ネットワークという視座を架橋して家族の問題を捉え、その対応策を検討することを提示する。

進化論的アプローチにより血縁に関わる家族の問題を捉え、血縁や遺伝子に対する意識を自覚化し、子どもの養育に対する地域と地域以外の人的ネットワークの支援を構築することにより、多くの問題を解消または軽減することに期待できる、と考える。